『西南アジア研究』No. 49, 1998

15世紀～19世紀半ばの中央アジア都市

R. G. ムクミーノワ
（久 保 一 之 訳）

ウズベキスタンは古くから都市文化が栄えた国である。都市は，経済的・社会的・政治的諸側面において，非常に重要な役割を果たした。筆者は単著，個別論文，ウズベキスタン後期中世史の概観において，以下のような研究課題について検討を重ねてきた[1]。すなわち，都市史の初段階，商品生産と商業の発展，住民の社会的構成，都市生活に見られる変化，15世紀から19世紀前半にかけて全般的には衰退へと向かう経済情勢に発展が見られる時期，などである。以下に述べるのは，これらの課題に関する研究成果を簡単にまとめたものである。

I

サマルカンド

サマルカンド，ブハーラー，タシュケント，シャフリサブズ，ヒヴァなどの諸都市は，本稿で扱う数世紀の間，手工業，交易，文化，学術の主要分野におけるセンターであった。もっとも大きな都市の一つで，15世紀から16世紀前半に国家の首都であったのがサマルカンドである。ザヒールッディーン・ムハンマド・バーブル Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur（1483－1530）によれば「驚くほど整備された町であった」という［BN：72；間野 1998：90］。アミール・ティムール Amīr Timūr（在位 1370－1405）の時代にサマルカンドは素晴しく再建され，まず第一に商業の発展という観点から，その役割がきわめて重要になった。その結果，新しいバザールが出現し，また，古いバザールが拡大されて，百年後にはバーブルを感嘆させるほどになったのである。バーブルは以下のように記している。

> この町には他の町ではあまり見られぬ一つの特徴がある。すなわち，各々の商工民は，それぞれに一つのバザールを持っていて，お互いに混じり合わない。よい習慣である。［BN：72－73；間野 1998：90］

その50年後の16世紀半ば，イギリス商社の代表，アンソニー・ジェンキンソン Anthony Jenkinson（d. 1610）は，全く同じことを，ブハーラーに関して書きとどめている。

> ［ブハーラーの町の］第3の部分が商人らと市場にあてられて，ここには商売のそれぞ

れの種類ごとに住居と市場とを構えている。[Jenkinson 1932 : 182 ; 朱牟田・越智 1983 : 40]

相互に交流のあった様々な国の人々が，互いに影響を及ぼし合った結果を示すものとして，19 世紀～ 20 世紀初頭のロシア人史家クリュチェーフスキーの言葉に注目せねばならない。彼は以下のように指摘しているのである。

西洋と東洋の影響を同じように受けたモスクワでは，ブハーラーほかの東洋諸都市と同様に，同種類の商品の取引が同一の店舗街に集中していた。……各々の商品に特定の位置・店舗群が指定されていた。[Kliuchevskii 1918 : 225]

14 世紀末から 15 世紀にかけて，サマルカンドでは，以下のような素晴しい建造物が建設された。すなわち，ビービー・ハーニム Bībī Khānim のマドラサとマスジド，ウルグベグ Ulughbeg のマドラサ，グーリ・アミール Gūr-i Amīr，シャーヒ・ズィンダ Shāh-i Zinda にある家系廟群，キョク・サラーイ Kūk Sarāy，ブスターン・サラーイ Bustān Sarāy，その他の宮殿，マスジド，マドラサ，ハーナカーなどである。これらの建造物は，中央アジアの人々の何世紀にも及ぶ経験に基づいて，才能ある工匠たちの高度な構想が実現されたことを証明している。ヤクボーフスキーは「当時のサマルカンドは建築とタイル装飾の分野において比類がない」[Iakubovskii 1946 : 19] と適切に指摘している。サマルカンドの建造物群の中では，ウルグベグの天文台が特別な位置を占めており，これはウルグベグ時代の文化・学術の金字塔である。

記念碑的建造物は，王族の成員だけではなく，例えば，ヤラングトゥーシュ・ビー Yalangtūsh Biy のような有力アミール（サマルカンドの統治者）によっても建設された。彼の命令によって，17 世紀の 30 ～ 40 年代に，レギスターン広場を囲む二つの素晴しい建造物，シールダール Shīr-dār のマドラサとティッラーカーリー Ṭillā-kārī のマドラサが建設された。

ブハーラー

16 世紀後半からは，ブハーラーがシャイバーン朝（1500 – 1601[2)]）の首都となる。ブハーラーはアシュタルハーン朝（1601 – 18 世紀 60 年代），後にはマンギート朝アミールのもとでもブハーラー・ハーン国の主要都市であり，それはブハーラー・アミール国が滅ぶ 1920 年まで続いた。チンギズ・ハーン家のハーンたちが政治の舞台から姿を消した後，マンギート諸族のアミールたちが政権を掌握したので，歴史家たちはブハーラー国をアミール国と呼んでいる。様々な分野の工匠たち，すなわち，建築家，設計士，左官，レンガ職人，タイル職人，石工，アラバスター職人，装飾職人，旋盤職人，指物師，大工などの努力によって，ブハーラーに記念碑的建造物が建設された。その中に，アブドゥッラー・ハーン ʻAbd Allāh Khān，クケルダーシュ Kūkaldāsh，マーダリ・ハーン Mādar-i Khān，ミーリ・アラブ Mīr-i ʻArab などの 16 世紀の諸マドラサ，イマーム・クリー・ハーン Imām Qulī

Khān（在位 1611－42）の高官ナーディル・ディーワーンベギ Nādir Dīwān-begī による 17 世紀の建造物群などがある。

16 世紀から 17 世紀初めにかけての対内・対外商業の発展によって，ティーム tīm（通廊式，アーケード式市場），タークṭāq（ドーム型屋根付きの市場），チャハール・スーク chahār-sūq などの商業施設が建設された。特別に割り当てられた場所，カッパーン kappān で穀物やその粉が販売され，綿花，半加工絹製品，桑の葉の販売，馬や家畜の取引にも特定の場所が割り当てられた。取引の対象となった品目の多さが，都市における商業の重要性を示す，一つの証拠である。16 世紀後半ブハーラー・ハーン国の政治・経済に決定的な役割を果たしたジューイバーリー・シャイフたち[3]によって，ブハーラーその他の都市に多くの公共施設が建設された。ジューイバーリー・シャイフたちは，膨大な土地，キャラバンサライ，店舗，製粉所，浴場，家屋を獲得していた。この点については，この一族に関する文書集 ADzh（売買文書，下賜文書など合わせて 400 点近くある）や，バドルッディーン・カシュミーリー Badr al-Dīn Kashmīrī の著作 RR に収められた書簡，ハーフィズ・タニーシュ Ḥāfiẓ Tanīsh の『アブドゥッラー・ナーマ ‘Abd Allāh-nāma』（別名『シャラフ・ナーマイ・シャーヒー Sharaf-nāma-yi Shāhī』）ほかの史料から情報が得られる。

タシュケント

15 世紀の最末期から 16 世紀の第 3 四半世紀までと，その後は 18 世紀から 19 世紀前半に，タシュケントにおける経済と文化の活発化が観察される。手工業や商業が発展し，今日まで残っている 16 世紀のバラーク・ハーン Barāq Khān のマドラサやクケルダーシュのマドラサのような教育施設が建設された。タシュケントの町は比較的人口稠密で，しかも住民のかなりの部分が商人や手工業者であった。ここで，金属製品や陶磁器，近隣草原地帯の遊牧民・半遊牧民のための低級粗織キャラコを含む様々な織物，武器，革，靴などが製造され，また，ここから馬皮の高級な鞍が各地にもたらされた［Mukminova 1981 : 31, 44 ; do. 1984 : 16－19］。

タシュケントの都市生活の中心であるチャール・スー Chār-sū のバザールは，専門分化した手工業・商業店舗街をもつ小さな町であった。チャール・スーのバザールは 10 世紀から同じ場所にあり，現在もその場所にある（ソ連時代，公式には「十月市場（Октябрьский рынок）」と呼ばれた）。バザールの各々の区画では概して同一の商品が販売された。ヌール・ムハンマド・ムッラー Nūr Muḥammad Mullā は，1734 年に以下のように書きとどめている。

> 各々のバザールで商品は一種類である。パンを売っているところでは，ほかのものは何もない。綿製品，絹，カフタン（裾長上衣の一種），ブーツなど，すべてタシュケントの別々の市場にある。［Dobromyslov 1912 : 17, 22］

また，都市の手工業製品と草原の畜産製品の恒常的な交換は，タシュケント住民と周辺草

原地帯住民の間の，恒常的な通商関係の維持や，相互の経済発展のための，一つの刺激であった。

II

都市においては，バザールが重要な役割を果たした。ふつう大都市には，商業・生産複合体の様相を呈した，主要なバザールがあった。そういうバザールは，主要道路の交差点に位置し，チャール・スー（字義的には四つ角・十字路）と呼ばれた。その中により小さな単位があり，そこで，専門的に商品が取引されたのである。例えば，タシュケントには，ブルガーリー・バザールがあったが，ここは，初期中世にヴォルガ河流域のブルガール王国から輸出され，その後 18 ～ 19 世紀にはブハーラーで製造された，独特の柔らかい皮を扱う市場であった。

大都市の主要なバザールは，たいてい，恒常的に開かれており，地元の商人だけでなく，バドルッディーン・カシュミーリーが言うように，近隣・遠隔の諸国，つまり「全世界から」仲買商人たちが訪れた［RR : 294 a–b ; Mukminova 1985 : 113］。なお，イブン・バットゥータ Ibn Baṭṭūṭa（1304 – 1368/ 69 or 1377）によれば，ウルゲンチ（古ウルゲンチ）のバザールは，金曜日は閉まっていたという［Ibragimov 1988 : 73］。

バザールの側にはマスジド，浴場，キャラバンサライが位置しており，外貨両替のための特殊な施設，サッラーフ・ハーナṣarrāf-khāna もあった。ブハーラーのような都市におけるサッラーフ（両替商）の役割について物語っているのが，サッラーファーン（サッラーフたち）のチャハール・スーク，サッラーファーン通り，サッラーファーンのキャラバンサライ，浴場，橋などの存在である。なお，サッラーフは高利貸しにも従事した。15 ～ 16 世紀には，初期中世から存在する“チェック”による，大規模な商業取引業務が大きく広まった。“チェック”という言葉は，後に東方から西方へと伝わり，ヨーロッパ諸国にも広まった。

都市の中心には，ふつう，法廷文書（契約文書）を作成する機関が存在した。写本の法廷文書集 MW を見れば，私文書がカーディー・ハーナ qāḍī-khāna，つまり裁判官の施設で作成されたことがわかる。ここで結ばれた契約には，何らかの職種の親方による徒弟の受け入れ，ドゥッカーン dukkān（店舗・工房）の貸借，奴隷やドゥッカーンその他の実利施設の売買，遺産相続に関するものなどである［MW : 118 a– 122 b ; Mukminova 1976 : 154 – 157］。興味深いのは，私文書を作成するために，女性も裁判官のもとへやって来た，ということである。都市の特権階級に属する個々の女性が，封建社会において，重要な役割を果たしていたことは，注目せねばならない。彼女らは建造物や橋の建設，商業などに参画していた。巨大なワクフ財産の管理者として，シャイバーニー・ハーン Shaybānī Khān（在位 1500 – 10）の息子の妻，ミフル・スルターン・ハーニム Mihr Sulṭān Khānim は，インドのザヒールッディーン・バーブルの宮廷に使節を送ったし［Mukminova 1966 : 62 – 63］，

また，バーブルの娘グルバダン・ベギム Gul-badan Begim は，非常に興味深い書物『フマーユーン・ナーマ Humāyūn-nāma』の著者である。

バザールは取引の行なわれる場所というだけでなく，対話のために詩人や文人が集う場所でもあった。また、正にこの場所に，特に祝ごとのある日は，綱渡り師，力士，歌手，楽士が現われた。これらの者たちが都市の富裕階級に寄生していたことを，アリーシール・ナヴァーイー 'Alī-shīr Navā'ī（1441－1501）は，「歌ったり踊ったりする者は施しもので生きている」[MQ : 37 ; Rustamov & Starostin 1970 : 28] と記している。なお、バザールでは罪人の処刑も行なわれた。

Ⅲ

サマルカンドやブハーラーのような都市の経済において，手工業は重要な位置を占めた。手工業の主要な分野の一つが織物業で，その発展の基盤は，現地産の原料，つまり綿花、そして絹であった。初期中世から 18 世紀まで，中央アジアからカザフ草原，ヴォルガ河流域，ロシア，ヨーロッパへと輸出されたのが，ザンダネチ zandanīchī 布（絹織物の一種）である [Mukminova 1976 : 58－60]。現地の住民から広く需要のあったその他の織物も生産され，同様に他国へと運ばれた。これに関連して述べておかねばならないのは，いくつかの織物は，マーワランナフルの一つの都市だけで生産されたということである。例えば，サマルカンドの職人たちは，高価な真紅のビロード（makhmal/bakhmal-i qirmizī）を製造し，これは他国に輸出された [Mukminova 1976 : 69－70]。現在，サマルカンドについてのみ，さらさ布（chīt）の生産とさらさ職人（chītgar）に関する資料が残っている [Mukminova 1976 : 62]。生産が場所に依存することは，アーラーチャ ālācha 布（縞柄で木綿または絹・木綿混成の織物），特にブハーラーのものについて見られる。ジューイバーリー・シャイフ文書集のワクフ文書その他の中で，アーラーチャ職人（アーラーチャバーフ ālācha-bāf）の住居とドゥッカーンは，ブハーラーについて言及されている [ADzh : document 10, 12, 52, 57, 81 ; Mukminova 1976 : 51]。

サマルカンドは，何よりもまず，様々な種類の筆記用上質紙が生産された唯一の都市で，15 世紀から 17 世紀の前半に生産が発展した。紙を美しくするために様々な色で装飾が施された。赤は幸福の色で，貴族階級の間ではバラ色の紙の上で愛を説くことが望まれ，青は喪の色と見なされた。真白な紙やその他の鮮やかな色は，速く目を疲れさせると考えられたため，様々な色調の紙を用いることが奨励された。18 世紀には，紙生産の中心はサマルカンドからコーカンドに移った。コーカンド紙は，品質ではサマルカンド紙にかなり劣ったが，すでに工場製の紙が主流となっていた 19 世紀においても，利用されていた。

手工業者たちは，都市において主導的役割を果たし，都市住民の中で最も利用価値の高い部分を構成していた。また，彼らは，専門分化された居住区の特定部分をも構成した。親方

たちは同業者組織で団結し，それを統轄する長がいた。これらの長たちは，ふつう，手工業者の居住区の指導者でもあった。国家は彼らを通じて，職人組織との関係を保ち，また，税を徴収した。

手工業者たちは，都市の社会生活に活発に参加した。政敵の攻撃の際には都市の防御に参加し，解放闘争に従事した。彼らの多く，特に長たちは読み書きができた。彼らの中から詩人や文人も輩出し，その一人が16世紀前半に活躍したザイヌッディーン・マフムード・ワースィフィー Zayn al-Dīn Maḥmūd Wāṣifī である。彼は、自身の回想録（*Badā'i' al-Waqā'i'*）の中に，手工業者出身の者たちの文化活動について，きらびやかな叙述を残している。手工業者たちは，商人たちと同様，その利益を強力な中央権力の存在に負っていたが，それは，強力な中央権力こそが，国家の安定を図り，彼らの活動に望ましい環境を用意し，無秩序から解放することができたからである。

18世紀初頭，アシュタルハーン朝のウバイドゥッラー・ハーン 'Ubayd Allāh Khān（在位1701－11）は，手工業者や小商人を国家機構に引き入れようとした。しかし，この試みは失敗に終わった。アミールたちや貴族階級は，自らの地位を譲ることを望まず，陰謀を企み，ウバイドゥッラーは殺害されたのである。その後，中央アジア諸都市は，経済的にヨーロッパ諸都市の発展から徐々に取り残されていった。18世紀末から19世紀には，加工製品，特に織物の代わりに，綿花やその他の原料を輸出するようになったのである。

※ 本稿は1996年11月9日第34回羽田記念館講演会（京都大学文学部）における講演内容［ロシア語，原タイトルはСреднеазиатский город и городская жизнь. (XV-сер. XIX в.)］の日本語訳である。翻訳にあたって転写法を改め，注・典拠・補足説明を若干追加した。

注

1） 単著としては Mukminova 1966；1976；1984；1985 があり，個別論文では，Mukminova 1993；1994；1995；1996 a；1996 b が最新のもので，1992年までに発表した論文については Habibullaev & A'zamova 1993 所収著作目録を参照されたい。また，最近 Askarov et al. 1993；do. 1996 や Iriskulov et al. 1996 などの通史・概説書においても本稿と関わるテーマで執筆した。なお，Iriskulov et al. 1996 は執筆者リストに各々の担当部分が明記されていないが，筆者が担当したのは "Economic Development and Trade of the State of Amir Temur" である。

2） シャイバーン朝の滅亡は，ブハーラーやサマルカンドを失った1599年とされてきたが［cf. McChesney, R. D., "SHĪBĀNIDS", *EI*²］，最近ウズベキスタンでは，最後の君主ピール・ムハンマド・ハーン Pīr Muḥammad Khān 2世がバルフに拠っていた1601年までをシャイバーン朝期とみなすようになった［Askarov et al. 1993：57］。

3） ホージャ・ジューイバーリー Khwāja Jūybārī と呼ばれ，16世紀半ばに活躍したホージャ・ム

ハンマド・イスラーム Khwāja Muḥammad Islām (d. 1563) の家系に属する，ナクシュバンディー教団のシャイフたちを指す。ジューイバールはブハーラー近郊の村落名で，ホージャ・イスラームの祖父がここに定住し，ジューイバーリー・シャイフと呼ばれ始めた。なお，RR の著者は，ホージャ・イスラームのムリードである［以上訳者］。

参考文献

ADzh : Из архива шейхов Джуйбари. Материалы по земельным и торговым отношениям Средней Азии ХУI века. Москва-Ленинград, 1938.

BN : Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur-nāma/Waqā'i'*, ed. Mano, E., Kyoto, 1995.
［間野英二『バーブル・ナーマの研究 I　校訂本』松香堂］

MW : *Majmū'a-yi Wathā'iq*. (Рук. Институт востоковедения АН РУз, инв. № 1386.)

MQ : Nawā'ī, 'Alī-shīr, *Maḥbūb al-Qulūb*, ed. Kononov, A. N., Moscow/Leningrad.

RR : Badr al-Dīn Kashmīrī, *Rawḍat al-Riḍwān wa Ḥadīqat al-Ghilmān*. (Рук. Институт востоковедения АН РУз, инв. № 2094.)

Askarov, A. A. et al. (eds) (1993) *Аскаров А. А., Мукминова Р. Г. и др.* (ред.) История Узбекистана. Том 3. Институт истории АН РУз. Ташкент.

Askarov, A. A. et al. (eds) (1996) *Аскаров А.* (бош муҳаррир) Темур ва Улуғбек даври тарихи. ЎзФА Тарих институти. Тошкент.

Dobromyslov, A. I. (1912) *Добромыслов А. И.* Ташкент в прошлом и настоящем. Исторический очерк. Ташкент.

Habibullaev, N. N. & G. A. A'zamova (1993) *Ҳабибуллаев Н. Н. ва Аъзамова Г. А.* (тузувчилар) Розия Галиевна Мукминова. ЎзФА Тарих институти. Тошкент.

Iakubovskii, A. Iu. (1946) *Якубовский А. Ю.* Черты общественной и культурной жизни эпохи Алишера Навои. — Алишер Навои. Сборник статей. Москва-Ленинград.

Ibragimov, N. (1988) *Ибрагимов Н.* Ибн Баттута и его путешествия по Средней Азии. Москва.

Iriskulov, A. et al. (eds) (1996) *Amir Temur in World History*. UNESCO. Tashkent.

Jenkinson, A. (1932) *Дженкинсон.* Путешествие в Среднюю Азию 1558－1560 гг. —Английские путешественники в Московском государстве в ХУI в. Ленинград.

Kliuchevskii, V. O. (1918) *Ключевский В. О.* Сказание иностранцев о Московском государстве. Петроград.

Mukminova, R. G. (1966) *Мукминова Р. Г.* К истории аграрных отношений в Узбекистане ХУI в. (По материалам „Вакф-наме“). Ташкент.

Mukminova, R. G. (1976) *Мукминова Р. Г.* Очерки по истории ремесла в Самарканде и Бухаре в ХУI веке. Ташкент.

Mukminova, R.G. (1981) *Мукминова Р. Г.* Из истории позднесредневекового Ташкента. — Общественные науки в Узбекистане. 1981 г.–№ 11.

Mukminova, R.G. (1984) *Мукминова Р. Г.* Тўрт аср олдинги Тошкент. Тошкент.

Mukminova, R.G. (1985) *Мукминова Р. Г.* Социальная дифференциация населения городов Узбекистана в ХУ–ХУI вв. Ташкент.

Mukminova, R.G. (1992) Craftsmen and Guild Life in Samarqand. In: *Timurid Art and Culture. Iran and Central Asia in the Fifteenth Century*, IV. Leiden/New York/Köln.

Mukminova, R.G. (1993) *Мукминова Р. Г.* Бухара — торгово-ремесленный центр средневековой Центральной Азии. — Бухара и мировая культура. Вып. 1.

Mukminova, R.G. (1994) *Мукминова Р. Г.* Ремесленное производство в Самарканде времени Улугбека. — Общественные науки в Узбекистане. 1994 г.–№ 7.

Mukminova, R.G. (1995) *Мукминова Р. Г.* Социальные слои населения по „Махбуб алкулуб“ Алишера Навои. — Восточное исторические дисциплины. Вып. 3.

Mukminova, R.G. (1996 a) *Мукминова Р. Г.* Расширение торговых взаимосвязей в Мавераннахре при Амире Темуре. — Амир Темур ва унинг дунё тарихидан ўрни. Самарқанд.

Mukminova, R.G. (1996 b) Les routes caravanieres entre villes de l'Inde et de l'Asie centrale: deplacements des artisans et circulation des articles artisanaux. *Cahiers d'Asie Centrale* 1–2.

Rustamov, A. & A. Starostin(tr) (1970) *Алишер Навои.* Возлюбленный сердец. Перевод А. Рустамова и А. Старостина. —*Алишер Навои.* Сочинения в десяти томах. Том 10. Ташкент.

朱牟田夏雄・越智武臣（1983） ジェンキンソン モスクワからブハラへの船旅（訳・注・解題）『イギリスの航海と植民』1（大航海時代叢書第Ⅱ期第17巻）岩波書店

間野英二（1998）『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注』松香堂

（著者：ウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史研究所）
（訳者：京都大学大学院文学研究科）